JLTA Newsletter No. 45
日本言語テスト学会
The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 45　　発行代表者：渡部良典　　2018 年 (平成 30 年) 9 月 30 日発行
発行所：日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1 順天堂大学さくらキャンパス
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001（代表） FAX: 0476-98-1011（代表）
e-mail: rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp URL: http://jlta.ac

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大学入学共通テストをめぐって

浪田　克之介

本学会はその専門性を生かして，外国語能力の測定と評価の研究・実践分野において普及啓発活動を行ってきた。例えば，学会のウェブ上では，チュートリアルまたワークショップビデオが用意され広く活用されている。また各種研修会のための講師派遣も可能である。

そのような活動のなかで本学会が昨年早々2020 年度に始まる大学入学共通テストにおける英語テストの扱いに対する「提言」を文部科学省（文科省）に提出したことは大きな意味を持つと考えられる。「提言」は解説を加えられて『英語教育』2017 年 5 月号（大修館書店）に掲載され，また学会のホームページでも公開されている。

この提言では，新共通テストの英語テストに民間資格・検定試験が導入されるに当たって，留意すべき問題点をとりまとめたもので，それらはきわめて当を得たものであった。そのことは昨年 6 月に国立大学協会（国大協）が外部試験の導入について文科省に詳細が示されることを要請した問題点とほとんど共通していることでも明らかである。すなわち，認定の基準及びその方法，学習指導要領との整合性，受験機会の公平性担保，受験生の経済的負担軽減等の具体的方法，異なる認定試験の結果を公平に評価するための対照の方法などを国大協は求めているが，本学会は認定に当たってさらにテストの質の検討，テスト改革のみに頼らず教員養成・教員研修の強化，テスト機関に学習につながるテスト結果の提供要請を取り上げている。

しかしこのようなきわめて重要な提言や要請にもかかわらず，文科省の対応はたいへん残念なものである。「認定」に当たって本学会が要望した透明性や情報公開はほとんど確認することができない。大学入試センター内に設置された「関係分野の有識者等で構成する」大学入試英語成績提供システム運営委員会が，システムへの参加を希望するテスト機関及び資格・検定試験が参加要件を満たしていることを「確認」したのであって，法的根拠に基づく認定制度ではないとセンターはいう。したがって資格・検定試験の「認定」とは資格・検定試験そのものの質や内容を評価するものではないことになる。なお，参加要件のうち，学習指導要領との整合性及び CEFR との対応関係等については文科省において対応したとのことである。

国大協は文科省に要請した諸問題の解決を見ることなく結論を急ぎ，2023 年度までは各大学の判断でセンターが実施する共通試験と資格・認定試験のいずれか，または双方を選択利用できるはずであったが，全受験生に両方を課すことを「基本方針」とした。その新共通テストの英語試験の第 2 回目の試行調査（本年 11 月実施予定）においては第 1 回と同様に，筆記（リーディング）の問題では，「読むこと」の力を把握することを目的とし，発音，アクセント，語句整序などの問題は出題せず実施し検証するとの問題作成方針が公表されている。この方針に関しても異論が出ている。

国大協は資格・認定試験の配点を英語全体の「2 割以上」などとする参考活用例を提示したが，新聞報道では約半数の国立大学が試験結果の基本的活用方針を決められずにいるとある（『朝日新聞』8 月 14 日付）。

国立大学共通の大学入試制度は第 1 回共通第 1 次学力試験が 1979 年に実施されて以来 1990 年に大学入試センター試験と名称を変え，今日までほぼ 40 年間にわたり継続されてきた。しかし，今回の英語テストに外部民間試験が導入される変革ほど大きな社会問題となったことはない。それは「グローバル化」などと言われる社会の変化に対応できる英語能力の養成を要求する経済界に応えられないだけではない。制度が発足した当初は国立大学の受験生のみが受験していたものが，今日では国公私立大の多くが活用するようになっており，「スピーキング」や「ライティング」のテストを実施するのには上述のような数多くの問題点があるからである。東京都は高校入試に独自の英語テストを開発しているとのことであるし，また東京外国語大学は大学の規模を利点として実施可能な入試用スピーキング・テストが運用されようとしている。センター試験では実施困難な運用力のテストは各大学の 2 次試験でカバーするとも検討できないか。東京外国語大学は他大学でも利用できる仕様で開発を進めているとのことである。

かってリスニング・テストがセンター試験に導入されていなかった頃，北海道大学は 2 次試験でリスニング・テストを実施した。試験会場のスピーカーで音声を流す単純な方式を採用したが，それでも条件をできるだけ均質にするためには，大きさなどの異なる会場に設置するスピーカーの位置と個数の確定に，音響学を専門とする学内の研究者と受験生に見立てた多数の学生と共に実験を繰り返した。運用力のテストでは，その準備と苦労はその比ではないことは当然であるが，この場合こそ外部の民間テスト機関の助力を得ることができないか。むろん入試センターで現在のリスニング・テスト同様に統一のテストが実施できればそれに越したことはない。いずれにせよ現在進められている外部試験の導入には未解決の問題があまりにも多すぎ，検討を加える必要がある。（本稿で使用した各種資料及び根拠は文科省，大学入試センター，国大協などのホームページ，新聞報道などと『検証　迷走する英語入試』（岩波ブックレット）に依拠したところがある。）

日本言語テスト学会
第８回最優秀論文賞
受賞者から
Message from the Recipient of The 8th JLTA Best Paper Award

Paul WICKING（名城大学）

Paper Title: The Assessment Beliefs and Practices of English Teachers in Japanese Universities

Being in the company of such first-rate researchers and academics as are the members of JLTA, I feel very humbled to

receive its 8th Best Paper Award. My sincere thanks go to the anonymous reviewers of the paper, who gave me such insightful comments and advice, to my doctoral research supervisor, Dr Toru Kinoshita at Nagoya University, and also to the many teachers who took part in this research.

It has often been said that Japan has a 'culture of testing', in that the influence of examinations extends far into the educational, economic, political and social life of its people. While there are certain high-stakes tests that occur at important junctures in people's lives, the vast majority of tests are produced, given, and assessed by teachers in their classrooms. It is these regular, frequent, low-stakes tests that guide learner behaviour and either foster or impede the development of productive learning processes.

Therefore, teachers who are making and giving tests play a crucial role in laying the foundation for students who will one day have to sit a high-stakes test that could have important social and economic consequences. In order to encourage and support these teachers, it is imperative that we understand their current beliefs and practices concerning assessment. Once we have that understanding, policies and guidelines can be created that further improve the way testing is conducted.

My paper was written based on data from a survey conducted with university language teachers in Japan. The results were encouraging, as survey participants indicated that their purposes for conducting assessment were mainly student-centred – to obtain information on student progress, to provide feedback, to diagnose student strengths and weaknesses, and to motivate students to work harder. In addition, those teachers felt very little pressure to prepare students for high-stakes examinations. This can be viewed as a good thing, as teachers were more interested in promoting and assessing genuine learning, as opposed to instructing students in tricks and strategies to get a good score on a paper test. And of course, if there is growth in genuine learning, then that should be reflected in better performance on summative tests anyway.

However, while teachers did believe that assessment is an effective tool for enhancing learning and improving motivation, they didn't really see its benefit for diagnosing strengths and weaknesses in their own teaching. Educational policymakers would do well to make the benefits of assessment results for professional development more explicit, and to train teachers in using them for this purpose. Moreover, teachers didn't report using self- and peer-assessment to a large extent. The use of such assessment has been linked to many positive outcomes in the literature, so it is hoped that these practices will become more widespread.

Once again, my sincere thanks go to the JLTA committee members, who do such great work in running our organization. Through their efforts, I hope that Japan will not be known as a 'culture of testing', but would increasingly be known as a 'culture of productive language assessment'.

(the author and the award)

Report on the 47th JLTA Research Seminar

July 14 (Sat), 2018

於：東洋大学白山キャンパス（東京）

「コンピュータ適応型テストの理論と実践」

報告者 熊澤孝明（東洋大学）

日本言語テスト学会第47回研究例会は，2018年7月14日（土）に東洋大学白山キャンパスにて開催された。テーマは「コンピュータ適応型テストの理論と実践」ということで，英語外部試験でも導入されているコンピュータ適応型テスト（CAT）ということもあってか，21名の参加があった。JLTA本部からは事務局次長の片桐一彦先生（専修大学）ならびに横内裕一郎先生（弘前大学）にお越しいただき，開会の辞は片桐先生，閉会の辞は横内先生よりいただくことができた。

本研究例会では3名の先生がたから基調講演をいただいた。はじめは木村哲夫先生（新潟青陵大学）より「コンピュータ適応型テスト（CAT）とは」というテーマでCATの理論について概要を説明いただいた。まずは項目銀行開発を含むCATの開発手順について説明いただいき，次にCATを実施する側からと受験する側からの意見・感想などについて言及された。実施する側としてはCATは効率よく短時間でより受験者に適した項目を出題できるという利点がある一方，CATは受験者にとって易しい項目が出題されないためか難しく感じるという難点が挙げられた。最後に，その課題に対しての解決策について説明いただいた。

次は小山由紀江先生（名古屋工業大学・名誉教授）より「CATはどこへ向かうのか？ダイナミック・アセスメントと認知診断評価の可能性」というテーマで講演いただいた。まず，実際にCATを実践されたテストとCATに対しての受験者の反応などを先行研究をもとに説明された。木村先生の講演にもあったが，CATは受験者にとって難しいとの反応が大半で，また受験者は易しいが項目数が多いテストのほうを好むとのことであった。次に，ダイナミック・アセスメントと認知診断評価について説明され，それぞれの理論をもとに構築されたCATの先行研究について触れられ，CATというアセスメントをいかに学習・指導と一体化させるかが今後の課題だと結ばれた。

最後に水本篤先生（関西大学）より「CAT語彙テストの開発と有用性の検証-オープンソースプラットフォームconcertoを利用して-」というテーマで講演いただいた。まずはCATの概要から始まり，concertoの説明と実際に実施された語彙テストを分析結果をもとに説明された。最後に，CATとコンピュータ型テスト（CBT）を比較され，テストの目

的に応じてCATを活用すべきと結ばれた。

各講演では質疑応答の時間を設けたが，フロアから盛んに質問がされ，先生がたが熱心に回答されているのが印象的であった。また，休憩中にも先生がたへ質問される参加者もいて，CATへの関心の高さがうかがわれた。例会後は先生がたを囲み，懇親会が開かれ，楽しいひと時を過ごすことができた。最後に，講演を快く引き受けてくださった3名の先生がた，わざわざお越しいただいたJLTA関係者の先生がた，暑い中足を運んでくださった参加者に感謝を申し上げます。

海外の学会・研究会 参加報告
World Conference Reports

The 2017 KELTA Conference

報告者 Myles GROGAN（関西大学）

大会名：The 2017 KELTA Conference
開催日：2017 年 12 月 3 日
テーマ: The Criterion-Referenced English Assessment in Korean Scholastic Ability Test
開催地：Hankuk University of Foreign Studies, Seoul, Korea

The 2017 KELTA Conference took place in Seoul at Hankuk University of Foreign Studies on December 3rd. An earthquake had affected the planning of this event. The same natural disaster had affected the College Scholastic Ability Test (CSAT), which was the theme of the conference. The validation of a criterion-referenced version of this test was the main theme of the conference, with keynotes and panel sessions from different perspectives informing the day. Ensuring year-on-year comparison of candidates and the long-term quality of the test would be familiar as themes to JLTA members, as would the debate surrounding the issue. While neither I nor my fellow delegate, Hidetoshi Saito, speak Korean, we were able to follow the gist of the debate with the help of interpretation from our kind Korean colleagues.

During the regular sessions, Saito Sensei presented on the use of formative assessment in junior high schools and high schools, using a mixed methods approach. This was followed by my own presentation on how the ILTA Guidelines for Practice fit into the work of the practicing teacher.

My takeaway from the conference was twofold. Firstly, there is much to learn from events outside my own day-to-day needs. The discussion in Korea helps to add perspective to inform the debate around change in university entrance in Japan. It was a timely reminder that that *policy* and *politics* share a common root word, and the effects of that are visible. The second aspect is the importance of collaboration between testing organizations generally, and the people in them specifically. The warm welcome that we received upon arrival shows the value of these connections.

Many thanks again to our Korean hosts. I would like to encourage all members to participate in the exchange program which allowed us to visit this conference.

書評
Book Reviews

『英語４技能テストの選び方と使い方―妥当性の観点から―』
小泉利恵　2018 年　アルク

大学入試に４技能テストが導入されることが決定され，その候補となる民間試験も公表されている。どのテストを選ぶかは各大学に任されることとなる。大学側は各テストが測定する英語能力を理解し，それが大学の求める英語能力と一致するかどうかを考えなければならない。また，高校側でも学校が行う英語教育が目指す能力と，テストが測定する能力の一致について考えなければならない。英語教育に関わる者は，現在，テストの妥当性について深く考えることを求められている。テストを理解し，活用する力，すなわち言語評価リテラシーを身につけることが今まで以上に求められていると言えよう。そうした時代の要請に応える良書である。第一線のテスティング研究者であり，特に妥当性について深く研究を重ねてきた著者こそ，この仕事に最適の研究者である。

本書は 4 章で構成されている。第 1 章「テスト選択・使用の悩みと誤解」では，言語テストに対する３つの誤認識とその対策が述べられている。誤認識とは，「言語テストへ過度な期待をする」，「言語テスト専門家への過度な依存をする」，「言語テストを１つの質の良し悪しだけで判断する」ことである。これに対し我々は，「完璧なテストなど存在しない」，「テスト専門家と使用現場を知る者が協力する」，「テストの質は多面的に考える」ことで対処しなければならない。

第 2 章「妥当性理論と妥当性検証」は本書の心臓部であり，筆者の緻密な妥当性研究の集大成と言える章である。筆者はテストの妥当性を「テスト開発者がテストで測りたいと思う能力がどの程度測れているか，また，使用目的にどの程度あっているかを示すもの」と定義する。さらに，妥当性とはテストそのものに内包されているのではなく，解釈や使い方によって変わるものであるという重要な指摘をしている。続いて妥当性の概念とその検証方法について，先行研究を丹念に追い，丁寧に解説する。テスティングの基礎知識がないと難しいと感じる章かもしれない。しかし引用されている Kane の「論証に基づく枠組み」は，基本的に私たちが学術や法廷の場で使う論証方法であり，それを研究者たちがどのように妥当性検証に応用しているのかを解説していることが分かれば，読者の理解も進むことだろう。

第３章「4 技能テスト妥当性検証」では，第２章で解説された枠組みを用い，一般に広く用いられている各技能のテストにおける妥当性を検証している。テストの解釈や使用方法によって検証に必要な推論は変わってくる。特に受容技能と発表技能では検証の前提が大きく異なってくる。実際のテストを用いての詳細な検証が，今後の私たちのテスト選択における指針を示してくれる。

第４章「テストを適切に選び，使う方法」は，テストの波及効果を先に考えることが，適切なテスト選択につながることを教えてくれる。プラスの波及効果を生み出すための選択方法を，波及効果の理論，測定したい構成概念などの側面から解説している。「テスト選択時の悩み：解決編」やコラム「4 技能テストが大学入試に導入されたときの波及効果の予測と，各利害関係者がとるべき行動」も，テスト選択に関して読者に大きな示唆を与えてくれるだろう。

妥当性検証とは多面的な試みである。また，研究が進むにつれ，妥当性という概念もまた少しずつ

枠組みを変えていくのであろう。大切なことは，本書が示してくれているように，我々が知性をもって妥当性の検証に取り組み，選択したテストが受験者にプラスの波及効果をもたらすよう努力することではないか。「完璧なテスト」は存在しないが，「より良いテスト」は常に存在する。本書はより良いテストを選択するための絶好の著作である。

評者　笠原　究（北海道教育大学）

JLTA 事務局より連絡
Messages from JLTA Secretariat

JLTA の活動にご理解とご協力をいただき，誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

⑴ 9 月 6 日発生の北海道胆振東部地震の発生に伴い 9 月 8 日および 9 日に札幌市の北海学園大学で予定されておりました本会 2018 年度全国研究大会の開催をやむを得ず中止することになりました。

自然災害の発生という不測の事態ではありますが，本会 2018 年度全国研究大会の直前の中止により，ご発表予定やご参加予定であられた皆様方におかれましては落胆されていることと存じます。

2018 年度全国研究大会中止後の今後の対応は以下となります。詳細は 9 月 25 日にメールにてお知らせいたしましたので，ご確認ください。

1. 中止された大会の延期開催等はございません。
2. 『大会発表要綱』（紙媒体）は一切配布することなく，廃棄処分にします。
3. 現在学会 HP 上に掲載されている『大会発表要綱』PDF 版には，広告ページ等を除いたすべてのページに，「Conference Canceled」と各ページに加筆したうえで，差し替え掲載しました。
4. 口頭発表予定だった研究内容は，他の学会の大会もしくは来年の本会の 2019 年度全国研究大会等でそのまま安心して口頭発表として応募できるものと認識しております。
5. 2019 年度全国研究大会は，2019 年 9 月上中旬頃に新潟青陵大学（新潟県新潟市）で開催予定です。本文書作成現在 9 月 11 日と 12 日で調整中であり，4 月中の決定を予定しています。最新の情報は JLTA のホームページ（http://jlta.ac/）をご覧ください。

⑵ 全国研究大会の中止に伴い，9 月 9 日に予定されていた総会も中止になりました。2018 年内に総会を都内で開く計画を立てておりますので，ご参加をよろしくお願いいたします。詳細については，メールと本学会ウェブサイト (http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=352) でお知らせいたします。

⑶ 7 月 14 日に東洋大学にて第 47 回日本言語テスト学会研究例会が開かれ，活発な議論がなされました。

2019 年 3 月 1 日または 2 日には，第 48 回日本言語テスト学会研究例会が，早稲田大学で開催される予定です。どうぞご参加ください。

⑷ 『日本言語テスト学会誌』第 21 号が近々発行され，お手元に届く予定です。学会誌の論文等は，J-STAGE (https://www.

jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal)
にて同時期に一般公開されます。

『日本言語テスト学会誌』は，狭義のテスティングに関するものだけではなく，広く評価に関する論文を募集しています。それには教育実践やプログラム評価に関するものなど，評価全般に関わる実験・知見を含みますので，どうかふるってご応募ください。次の投稿締め切りは2019 年 5 月の連休明け（5 月 7 日(火)）です。

なお，執筆要項に修正があり，提出先も以下に変更になりましたので，ご注意ください。

原稿提出先：学会誌投稿用メールアドレス
jlta-post@bunken.co.jp
最新情報は以下へ：http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62

(5) J-STAGE (https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal) における『日本言語テスト学会誌』のアクセス状況（2017 年 10 月～2018 年 7 月）は，日本からが 932 件，中国からが 1268 件，アメリカから 883 件で昨年の同期間に比べ日本国内からのアクセスが倍以上になりました。アメリカからのアクセスは昨年の半分程度に減った一方，中国は 1.5 倍増，その他オーストリア，韓国，フランスからも 100 件以上のアクセスがあり，全体的に昨年度よりもアクセス数が増えました。

(6) 本学会ウェブサイトには，Web 公開委員会が公開を進めてくださった，チュートリアルとワークショップ・ビデオがあります。どうぞご利用ください。

WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

チュートリアル（Tutorial，日本語）

- 「よい」テストの条件（What is a ‘good’ test?: validity, reliability, and practicality)
- テストの構成概念（The concept of test constructs)
- テスト細目（Test Specification)
- リーディングテスト（Testing Reading-6 basic test formats-)
- リスニングテスト（Testing Listening)
- ライティングテスト（Testing Writing)
- スピーキングテスト（Testing Speaking)
- 語彙・文法テスト（Testing Vocabulary & Grammar)
- 測定の標準誤差（Standard Errors of Measurement)
- 効果量とは？（What is the ‘Effect Size’?)
- 学習に役立つテスト結果の報告（Test result reporting to enhance learning)

ワークショップビデオ（主に日本語）

2014
- Workshop 1 – CAT の基本的な考え方（スライド）
- Workshop 2 – J-CAT（スライド 1，スライド 2，スライド 3）

2015
- Workshop 1 – テストデータ分析入門（in English）
- Workshop 2-1 – 生徒の力を伸ばす定期テストの作り方―妥当性と信頼性に留意して（スライド）・Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students’ English Proficiency（スライド）

2016
・Workshop 1-1 初めて学ぶ効果量ー入門編（スライド）
・Workshop 1-2 初めて学ぶ効果量ー理論編（スライド）
・Workshop 1-3 初めて学ぶ効果量ー実践編（スライド）

2017
・Workshop – テキストマイニングを使った自由記述式アンケートの分析

(7) JLTA 研修講師派遣事業が 2017 年度から始まり，２年目に入りました。本事業は，テスト利用・作成に関わる研修を行う機関・団体に JLTA より講師派遣を行うものです。会員の皆様におかれましては，未会員の言語テスティングにご興味のある方々へご周知くださいますようお願いいたします。
ウェブサイト：
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929

(8) その他
●会員情報や会費納入状況の確認・修正ができる「マイページ（https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login）」はご利用いただいていますでしょうか。ログインに必要な会員番号やパスワードを紛失された方は以下からお問い合わせください（https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact）。マイページ内の会員向けページにおいて，ジャーナル・ニュースレター等の掲載があります。
●所属や書類発送先など登録情報にご変更がある場合，マイページでの登録情報の変更を３月末までにお願いいたします。学生会員の方には，毎年学生証のコピーをご提出いただいています。
●2017・2018 年度の会費振込について，これからの方は早急によろしくお願いいたします。2017 年度分のお支払いがない場合には，2019 年４月より送付物の発送がなくなり，マイページの使用もできなくなります。
●本会の退会を希望される方は，事務局（jlta-post@bunken.co.jp）へご連絡をお願いいたします。

文責：
JLTA 事務局長 小泉利恵（順天堂大学）
JLTA 事務局次長 片桐一彦（専修大学）
横内裕一郎（弘前大学）
深澤真（琉球大学）
日本言語テスト学会（JLTA）公式
Twitter アカウント: @JLTA_official
https://twitter.com/JLTA_official

Messages from the Secretariat

We are thankful for your support of and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you may have.

(1) As a result of the earthquake in Hokkaido which occurred on the 6th of September, we were left with no choice but to cancel the 2018 Annual Conference scheduled to take place on the 8th and 9th of September at Hokkai-Gakuen University in Sapporo. While the cancellation of this year's conference due to a natural disaster of this kind could hardly be foreseen, those members who were scheduled to deliver a presentation must have been greatly disappointed at having

lost the opportunity to make a contribution to the field.

Please find below the important items with respect to how we will be handling matters following the cancellation of the 2018 Annual Conference. More details were described in an email message sent on September 25.

1. The conference will not be postponed for a later date.
2. We have decided not to distribute the printed version of the *Conference Handbook*. Instead, we will dispose of all the existing copies.
3. With regards to the PDF version which is currently located on the association website, we have replaced it with an updated version, where each page (apart from the advertisements) has the words "Conference Canceled."
4. Regarding the Contents of the Presentation that the presenter had scheduled, all presenters are free to make a presentation that they prepared for the JLTA 2018 at either a different conference or at the 2019 JLTA Annual Conference.
5. The 2019 Annual Conference is scheduled to take place in early September, 2019, at Niigata Seiryo University in Niigata City, Niigata Prefecture. At the time of writing, it is most likely held on the 11th and 12th of September. We shall make the final decision about the details by the end of April 2019. The latest information can be found at http://jlta.ac/

(2) Along with the cancellation of the 2018 Annual Conference, our General Business Meeting scheduled to be held on September 9 was canceled. We are now planning to hold the JLTA 2018 General Business Meeting by the end of this academic year, though details are yet to be decided. We will keep you updated by an e-mail and on our webpage (http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=352).

(3) The 47th JLTA Research Meeting was held at Toyo University on July 14, at which there was a lively discussion.

The 48th JLTA Research Meeting will be held at Waseda University on either the 1st or the 2nd of March.

(4) The *JLTA Journal* Vol. 21 is being printed and will be sent out soon. This volume will be uploaded onto J-STAGE (https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal) soon after the publication.

The *JLTA Journal* is inviting various types of contributions that include studies related to evaluation in a broader sense, such as classroom-based practice and program assessment that deal with issues and topics on testing and

assessment. The next submission deadline is the first day after the end of Golden Week (Tuesday, May 7, 2019).

We have revised the Journal Guidelines. The submission email address has been changed as follows: jlta-post@bunken.co.jp

Please see http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62 for details.

(5) Readers from around the world have accessed JLTA Journal articles via J-STAGE (https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal).

From October 2017 to July 2018, there have been 932 retrievals from Japan, 1268 from China, and 883 from the U.S. Accesses from Japan doubled over the same period of time in the last year. Although the retrievals from the U.S. decreased by half, retrievals from China increased by half. In addition, more than 100 retrievals from Austria, Korea, and France were earned. On the whole, page views of our journal increased compared to last year.

(6) Our website has various, useful contents for the public, and the Web Publication Committee created or organized them. Since some contents are in English, we hope you use them to the fullest.

WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

Tutorial (in Japanese)

- What is a "good" test?: Validity, reliability, and practicality
- The concept of test constructs
- Test Specification
- Testing Reading-6 basic test formats-
- Testing Listening
- Testing Writing
- Testing Speaking
- Testing Vocabulary & Grammar
- Standard Errors of Measurement
- What is "Effect Size"?
- Test result reporting to enhance learning

Workshop Videos

2014 (in Japanese)

- Workshop 1 – Basic Concepts of CAT
- Workshop 2 – J-CAT

2015

- Workshop 1 – Introduction to Test Data Analysis (in English)
- Workshop 2-1 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (in Japanese)
- Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (in Japanese)

2016 (in Japanese)

- Workshop 1-1 – Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Beginning Guide)
- Workshop 1-2 – Introduction to Effect Size: Basic Concepts and

Practices (Theoretical Guide)
・Workshop 1-3 – Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Practical Guide)

2017 (in Japanese)
・An Analysis of Free Descriptive Questionnaire by Text Mining

(7) We have started the JLTA Training Lecturer Dispatch project, which aims to send a lecturer from JLTA to institutions and organizations that would like to hold a training session or meeting on test development and use in 2017. Please feel free to convey this information to those who may be interested.
Website: http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929

(8) Other information
●Have you visited the "My Page" site (https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login), where you can check and modify your membership information and check your yearly membership fee payment status? Please contact us (https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact) if you need your membership number and password, which are necessary details for the login. You can access recent *JLTA Journal*s, previous newsletters, and other materials specifically for members on the "My Page" site.
●If you have changes in your affiliation, address, and other information, please update your registered information on "My Page" by the end of March. We annually send student members a message asking them to submit a copy of a student certificate.
●If you have not yet paid the yearly membership fee for 2017 and 2018, please do so at your earliest convenience. If you do not pay the fee for 2017, you will receive no shipment from JLTA and will not be able to use the "My Page" site after April 2019.
●If you plan to leave JLTA, please let us know by sending a message to jlta-post@bunken.co.jp

JLTA Secretary General
Rie KOIZUMI (Juntendo University)
JLTA Vice Secretary General
Kazuhiko KATAGIRI (Senshu University)
Yuichiro YOKOUCHI (Hirosaki University)
Makoto FUKAZAWA
(University of the Ryukyus)

JLTA Official Twitter account:
@JLTA_official
https://twitter.com/JLTA_official

＜編集後記＞
残念ながら北海道胆振東部地震のため，今年度の JLTA 全国研究大会は中止となりました。被災された方々にはお見舞い申し上げますとともに，一日も早い復旧を願っております。また，中止に関しましては素晴らしい危機管理能力を発揮し，大きな混乱なく

事を収めてくださった大会実行委員及び事務局のみなさまに心より感謝いたします。(KK)

次のような原稿を募集しておりますのでどうぞお寄せください。1）海外学会報告，2）書評，3）研究ノート，4）意見，またその他当学会員の興味関心に沿うもの。

日本言語テスト学会事務局
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1
順天堂大学さくらキャンパス
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001（代表）
FAX: 0476-98-1011（代表）
e-mail: rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp
URL: http://jlta.ac

編集： 広報委員会
委員長 笠原究（北海道教育大学旭川校）
副委員長 宮崎啓（東海大学）

委員
飯村英樹（群馬県立女子大学）
古賀功 （東海大学）
齋藤英敏（茨城大学）
長沼君主（東海大学）